

同盟経済事情

「だいぶ顔色も良くなりましたね。リハビリも順調だと聞きました。これなら、予想よりも早い時期に退院も可能だとも……」

「当たり前だ。六ヶ月も病院で寝ていられるものか。こんな怪我、三ヶ月もあれば十分だ」

宇宙暦八〇〇年一月末。バーミリオン会戦での負傷で入院して、もう二ヶ月に近い。ベッドの上に上半身を起こしたまま、グレーチェン・ヘルクスハイムは、眉間のほんの少し皺を寄せて唇を尖らせた。その唇も、本来の彼女らしい淡い珊瑚色の健康な彩りを取り戻している。入院当時は血の気を喪った、ほとんど土気色と言って良いほどだったのだが。

「もう、こんなものが始めていますね。興味ありませんか？」

ヴェンツェル・ハインリッヒ・フォン・ベンドリング同盟軍中佐は、ほっとしたように頷き、携えてきた書類を彼女に手渡した。分厚い紙のそれではない。掌ほどのサイズの薄い合成樹脂のシートに、通常の書類なら優に数百ページを収めることのできる光学書類^{ホロ・ドック}で、街角で売られている新聞や雑誌も、紙と合わせてこの形態で売られていることが多い。

「ふーん『バーミリオン会戦を読み解く・決定版』か……」

眉間の皺を消したグレーチェンが書類を開くと、空中にタブロ

イド版ほどのサイズのホログラフが浮かび上がる。彼女がばらばらと書類を繰っていくに連れて、びっしりと文字を連ねたページに合わせて、いくつもの図表、さらには立体表示の星図や航宙図が浮かび上がっては消えるのを、紫水晶の瞳が素早く追いかけていく。

『正史』にもある通り、最も広義での『バーミリオン会戦』は、ヤン艦隊による帝国軍三個艦隊の連破に始まる一連の戦役を指すものであり、最も狭い意味ではラインハルトとヤンが直接の干戈を交えたバーミリオン星域での艦隊戦闘を意味する。ただし、バーミリオン星域での戦いも、純粹にラインハルトとヤン麾下の艦隊のみが砲火を応酬した戦闘の他に、同盟軍のウランフとミュラー、さらには長軀フェザーンから戦場へ駆けつけてきたキルヒアイス艦隊との戦いも同時に進行していたのである。会戦の最終版に至ってキルヒアイスが一部の直率艦隊を割いてラインハルトの救援に赴くなど、ただ戦闘の経緯だけを取ってみても、これまで両国間で戦われた、いかなる会戦とは比較を絶した複雑な様相を呈している。

加えて、マリィンドルフ幕僚総監代行……と多くの史書は記している……の徳憑による、帝国軍の双壁による同盟首都急襲作戦と、あたかもこれを予期していたかのとき、同盟政府の移転。同盟政府の移転先を帝国軍が察知するに至った経緯、そして同盟政府最高評議会議長ヨブ・トリューニヒトによる劇的な……なる用語を用いる史家が少なからず存在するのは事実である……無条件降伏受諾など、この一連の戦いは単に戦術上に留まらず、戦略から政略に至るまで、実に多面的な要素をはらんで、多くの研究者や作家の興味を惹き続けることになる。

グレーチェンが手にしている研究書は『最も狭い意味での会戦』

の経緯を辿ったものだった。最終的な参加兵力は、帝国軍が三万六九四〇隻で兵員四四七万四三〇〇人余り。同盟軍はヤン直率艦隊と、こちらも含め最終段階で戦場に突入してきたメルカツ艦隊を合わせて三万八二〇隻、兵員総数は三五八万五〇〇人強を算した。

帝国軍の完全喪失艦艇二万三二二隻に達し、一万一八七四隻が損傷をこうむった。人的損失も莫大であり、戦死者二一八万六二一〇人、負傷者一〇三万三四六〇人に及んだ。帝国軍将兵の四人の内三人までが死傷した計算であり、数字だけを見るならば帝国軍の大敗北との評価も可能である。

ただし、同盟軍の損失も小さなものではなかった。喪失艦艇九六二八隻、損傷を被った艦艇は八〇五〇隻。将兵の損失は、戦死一三万五三八〇人、負傷者は四〇万九六一〇人であり、同盟軍も二人に一人は無事に会戦の終結を迎えられなかった計算となる。

『帝国軍の損耗率は、艦艇で八七パーセント、将兵で七二パーセントに達した。会戦後、戦闘を継続し得た艦艇は僅かに四八〇〇隻余りであるのに対して、同盟軍はなお一万隻余が戦闘力を残していた。かつ、帝国軍はローエングラム元帥とキルヒアイス上級大将の二人が二人ながら戦場にありつつ、この劣勢を甘受せざるを得なかった。この二点を以てしても、会戦が同盟軍の勝利に帰っていたことは明らかである』

「なんだ、もう終わりか」

数十ページほどの記事をざっと最後まで流し読みし、最終項に掲げられた結論に目を凝らしてから、グレイチェンは不満そうに呟いた。

「その厚さでも不満ですか、グレートヒエン？」

ベンドリングは苦笑する。

不満ではない——グレイチェンは頭を振った。

「決定版を謳っているにしては中身が薄いと言いたいだだけだ。会戦の勝利者はヤン・ウェンリー元帥か、それともローエングラム帝国公爵か……戦略的にローエングラム公の勝利、戦場の勝利者はヤン元帥。それだけのことを結論するためだったら、こんなに書く必要はないし、もっとあの戦いを論じるなら何百ページも必要だ」

それに——とグレイチェンは付け加えた。残存艦艇の数で言うなら、同じバーミリオン星域で戦われていたウランフとミュラーの戦いもカウントしなければ不公平だろう。この戦いでは、数に勝るミュラーをウランフが必死に支えてその戦場突入を防ぎきったのだが、戦闘停止命令が達した時、ウランフ麾下で戦闘力を残していた艦艇は二割もなかったという。一方、ミュラーはなお六割近い健全な兵力を有しており、合算すれば、おそらくは互角か、同盟軍が数パーセント有利という数字にしかないだろう。いずれにしても、彼我合計で優に六〇〇万人以上が死傷した戦いである。その勝敗を論じるのに数パーセントの差異にどれほどの意味があるだろうか。

「本来にあの会戦が分析されて、歴史として定着するのは、まだ何十年か先になるかも知れませんね。今は、同盟側と帝国側の、いわゆる軍事評論家とやらがヤン元帥が勝った、いやローエングラム公が勝利者だ、とそればかり議論しているような段階です。気に入らないなら、私が持つて行きますが？」

一応、自分もまだ現役の軍人であり、情報部の所属であるからには、興味以前に知識としてバーミリオン会戦の経緯は必須だとい

うベンドリングに、グレーチェンは小さく首を振った。

「いや、読む。とにかく、あの時何が起きていたのかを少しでも知っておきたい……当事者というのは目の前しか見えていないから、何が起きてああったのか、自分の経験だけではさっぱり分からない」

まだ厚くりヴァ・テープと包帯に包まれたままの頭部を、グレーチェンはちよつと煩わしげに指さす。もう、そろそろ包帯は取れるし、リヴァ・テープも不要だろうと言われているのだが、硬膜外出血という負傷は念には念を入れるに十分なほどの重傷だった。

「特に私の場合、目の前に『バルバロッサ』が出てきて『ネルトリンゲン』と撃ち合ったと思った瞬間に負傷して、あとは何が何だか分からない状態だったから。こんな程度でもないよりは増した。ただ、勝った、負けたの議論はつまらないな。負けたことは確かなんだから。士官学校では、戦略目標を達した方が勝ちで、達せられなかった方が負けだと習ったぞ。この戦いで戦略目標……つまり同盟政府の降伏を勝ち取ったのは帝国軍だ。同盟軍はあの者の首を取れなかった」

身もふたもない口調で言い切り、グレーチェンは光学書類をサイドテーブルの上に置いた。サイドテーブルには、すでに一〇枚を超える光学書類や、こちらは紙に印刷されたペーパーバック数冊が載せられていて、この年若い女性……もう間もなく実年齢で一八歳を迎えようとしている同盟軍大尉が、ほんの数十日前の戦いに並みならぬ関心を寄せていることを語っている。

「そうだ、言うのが遅くなった。お疲れさま、ヴェンツェル・ハインリッヒ。新しい地位は大変だろう？」

初めて会った頃のグレーチェン……当時はまだマルガレータだったが、彼女なら『苦勞じゃった、ベンドリングとやら』などという言い回しを使っただろう。ビスク・ドールのように端正だが、人形の柔らかさには欠けた、どちらかと言えばきつい顔立ちのグレーチェンだったが、ここ一月ばかりは表情に柔和さが目立つようになった。張り詰めていたものが一旦消えて、今はこの微睡みにも似た平穏をとにかくも楽しんでいるようにも見える。

ただ、永久にそのまま微睡みの中に佇んでしまつてもいいのだろう。サイドテーブルに積まれた書籍の数がグレーチェンの内心を物語っている。

「そうですね。楽しい職場というわけには行きませんが、これは誰にしても同じでしょう。誰かがやらねばならないことですし」

「帝国との和約が成立して、対帝国諜報課なども不要になるかと思えば、高等弁務官事務所との連絡士官とは、そなたも貧乏くじを引いたものだ」

グレーチェンは笑うが、ベンドリングにしてみれば笑い事でもないし、彼女が本気で彼の不運を嗤っているとは思っていない。

「私はヘルムート・レンネンカンブなる人物を知らない。そなた、帝国軍人だった頃に面識があったと言わなかったか？」

「ええ、例の、あの任務の際です。ヘル・レンネンカンブは大佐でした」

『例の、あの任務』という言葉にグレーチェンの眉が曇る。彼女の父ヘルクスハイマー伯爵が企てた同盟への亡命。それを追撃・捕捉し、ヘルクスハイマー伯が持ち出した帝国軍の軍事機密を持ち帰ること。それがベンドリングとラインハルト・フォン・ミューゼ

ル中佐(当時)に与えられた任務だった。

「当時、レンネンキャンプ大佐はミューゼルの直属上官でした。あだ名は、『正義の人』、レンネンキャンプ大佐』だったと聞いていますよ」

「なんだ、その正義の人っていうのは？」

珍しいことに、思いつき愉快そうにグレーチェンの笑いが大きくなる。

「……つまり、あれだな。要するに守るべきは軍紀、憎むべきは士気の弛緩。上官は部下をいたわり、部下は上官を慕いつつ、手を携えて共に為すべき目標へ前進せよ。そういうタイプの人ということか」

「辛辣ですね」

辛辣だが、事実だ。確かにレンネンキャンプ大佐は頭の硬い、言ってみれば軍国主義が服を着て歩いているような人だったが、それだけでローエングラム公の元帥府に登用されるはずもない。

「ローエングラム公が登用するほどの公正な人物なら、無用に同盟政府に圧力をかけてくると言うことはないだろうし、そなたが苦勞することも少ないんじゃないのか」

「そうですね。そのはずなのですが……どうも、昔の『正義の人』、レンネンキャンプ大佐』を期待するのは無理なようです」

「そうか……やっぱり」

「何がやっぱりなんです？」

苦々しげな口調になったベンドリングに、グレーチェンはサイドテーブルから一通の書類を拾い上げた。

「出頭命令ですって、高等弁務官事務所へ、あなたが!？」

「なんだかよく分からないが、あの会戦の時、『ヒューベリオン』と『ネルトリンゲン』のブリッジにいた士官全員に届けられたらしい。ただし、ヤン元帥……ええと、ヤン退役元帥と言った方が良いのかな。ヤン退役元帥とフレデリカ・グリーンヒル・ヤン退役少佐は除外されているようだけれど。ロッティも命令書を受け取ったと、さっき聞いた」

「セーデル中尉も、ですか」

「そうですね、あたしも、です、ベンドリング中佐」

ノックもなく病室のドアが開いて、黒髪を肩先で切り揃えた、小柄な女性が入っていた。大きな丸い素通しの奥で髪に劣らず漆黒の大きな瞳が、好奇心満載の猫に似て生き生きと良く動く。グレーチェンの同期生で親友でもあるシャルロッタ・ゼーダーシュトゥレーム中尉。通称はロッティ・セーデル。

名前はともかく、どうして苗字まで通称を名乗るのだと一度訊いたことがある。グレーチェン自身も、亡命前、両親からはマルガレータの愛称であるグレートヒエンと呼ばれていた。だから、名前が愛称や通称で呼ばれることには違和感を感じないのだが。

ロッティの反応はあっけらかんとしたものだだった。

「だって、ゼーダーシュトゥレームって長すぎるんだもの。一瞬一秒争うときに、おい、ゼーダー、うっゼーダーシュタ……じゃなくてゼーダーシュトゥレーム少尉、だなんて囁んでたら間に合わなくならない？」

「それは……わかるが……」

「あたし自身だって、ゼーダーシュトゥレーム少尉、出頭致しましたってやるよりセーデル少尉、参りましたの方が言いやすいも